



夏に雪辱期す！ '87朝レ惨敗

毎年恒例の5月3, 4, 5日に琵琶湖漕艇場に於いて行われる朝日レガッタで今年は惜しくも同志社対校, Jr. クルー共に決勝進出を果たし得なかった。今年の第40回記念レガッタには昨年アジア選手権大会優勝の中国クルーを招待, また2位の東レ滋賀, 同じくアジア選手権無しベア優勝のメンバーを擁するマツダ・日大混成クルーが参加しての白熱したレースとなった。

朝日レガッタ

対校エイト レース回想

〔予選〕

5月3日の予選は午後から強風と波のため一時中断結局中止となり4日へと順延された, 翌4日風向きは逆であるがまずまずのコンディション。今シーズン最初のレースにオールメンの気迫が感じられる。対校クルーにはエイトでのレースが初めてという若いメンバーが3人乗ってはいたものの秋合宿以来着実につけてきたパワーと根性また3月からの猛練習で経験の少なさをカバーする。予選では昨年度優勝の東レ滋賀にどこまで迫れるかが課題である。スタート用意, ヨーイローの声と共に今シーズンのレースが始まった。スパートからコンスタントに入りなかなか良いリズムであったが, 東レが徐々に前へ前へと出はじめる。しかしここであせりは禁物。3位でも準々決勝へは進めるという精神的余裕からか後半関大から逃げきり2位で次のレースへと駒を進めた。

〔準々決勝〕

準々決勝第一レース, アジア大会の覇者中国クルーとの対戦となった。ここはもう胸を借りるつもりで思いきり漕ぐしかない。アジアの速さとはどんなものかを身をもって知る良い機会である。メンバーも予選を漕いでかなりリラックスできているようである。順風によってスタートを切る。中国クルーのスタートはそんなに速いものではないがコンスタントにはいつてからの一本一本



の引きの強さは他を圧倒しておりグイグイ前へ進んでいく。我が同志社クルーも前半鹿兎島大に遅れをとっていたものの後半600mからリズムにのりその差を除々に詰めていったが敵もさるものキャンパス差で2位を譲ってしまうこととなった。

〔準決勝〕

明けて5日, この日も強い逆風と波のため各クルー容易にはスタート位置につけず定刻より1時間弱遅れてのスタートとなった。前回の準々決勝で3秒の差で敗れた中国クルーと二度目の対戦となった。真横のレーンにつけた中国クルーを見ると手足も長くさすがに大きい, 貫録充分である。しかし気合いは負けていない。前半6艇がほとんど並んだ形であったがやはり中国クルーが徐々に出てゆく。後を追う京大, 関大, 同志社。500mを過ぎてから関大を促える。しかし簡単には抜かせてくれない。抜きつ抜かれつのデッドヒートを繰り返したが関大をさす寸前にゴールをくぐってしまった。奮闘虚しくここで朝日レガッタの幕を閉じてしまった。

その年のシーズンの先行きを占う朝日レガッタに準決勝敗退してしまった対校クルーではあるが, クルーとしての取獲もあり又これからの課題も得られた貴重なレースであった。



朝日レガッタ詳報

Jr.エイト

この冬以来我々は有酸素運動能力の開発に重点を置いてきた。機械測定による数値からみても、各自が最大瞬発力の八割以上の筋力を発揮するこの能力は、充分納得のいく結果がでていた。シーズンに入り4月半ばを過ぎると、単漕の記録も同志社Jr.として自信の持てるものとなっていった。試合前の調整では、二回生が多くしかも一般生が多いため、それまでの我武者羅な練習との違いに戸惑いながらも実感を強めていった。初日の3日は生憎の大波でレースは中止となり、翌4日の一日で予選と準々決勝が行われる羽目になった。5月4日。午前の予選では適度な興奮が集中力を生んで、対校をも凌ぐと自負していたスタートスパートが遺憾なく発揮された。残念なことに立命館大のフライングにより再スタートとなったが、Jr.クルーとしては最高のタイムで午後の準々決勝へと駒を進めた。準々決勝では、予選で競り負けた関学対校、強敵滋賀(経)に対して、スタートスパートからコンスタントまでで一気に勝負を決める作戦に出たのだが、細かいミスを重ねスタートでは逆にいられてしまった。切羽詰った我々はコンスタントにはいり足蹴りを乱発！先行する滋賀(経)、関学に追いつがった。我慢を重ねた我々はラストスパートにはいった関学を追うようにスパートをかけ、滋賀(経)を促えた。極限状態でのスパートは予想外に艇速を伸ばしそれに最後の望みを賭けた。しかし波によってバランスを崩すと、もう立て直す力は我々には残っていなかった。今思えば、キャッチの戻り、弱い引き切り、体重返しの甘いフォワードと漕法がまるで確立しないまま、覇気だけで艇を進ませてきたような試合だった。パウが今大会限りでマネージャーに転向することもあって、絶対勝ち残りたかった一戦ではあったがそれだけに敗北感、最後に尽きた精神力、不完全であるために環境の変化に対応できない漕法等試合でしか得られない課題が貴重なものに感じられている。経験不足と精神的もろさを露呈してしまったレースだったが、その課題は貴重な教訓となり、屈辱をほらそうという執念は練習の大きな原動力となっている。

シングルスカルに 出場して

配川 隆 司

5月3日、5時30分起床。眠気も覚める緊張。あわただしく朝食をすませ、6時40分発艇。ステッキポートにつけた時には艇の方向を定めるのに必死だった。7時30分スタート。スタートダッシュが上手くいき100m付近で龍大の選手が止まってしまったこともあり予選の通過は確信出来たため余裕をもって漕げたと思う。結局予選は幸運も手伝い2位であることが出来た。4日の準々決勝は前日の予定が繰り下がったため11時半すぎのスタートとなった。他の選手にスタートからついてゆこうと思っていたのに実際はいきなり視界から消えられ、結局4位に終わった。しかしスカルに乗ったおかげで色々な勉強が出来た事は感謝しています。



大会結果 第40回朝日レガッタ 5月3日～5日

対校エイト	同志社(末瀬、坂本、佐藤、星沢、平松、原、西田智、若山、西田利) 準決勝 敗退
Jr.エイト	同志社艇友会(米原、石田、井上、島田、石橋、内藤、前田、朝倉、関谷) 準々決勝 敗退
シングルスカル	配川隆司 準々決勝 敗退



新 入 部 員 紹 介

昨年来、新人勧誘に力を入れている我が部であるが、今年も6月1日の合宿入り時点で、セレクション4名の他に一般新人12名の入部者を得ることができた。総勢16名の新人達は多士済々、磨けば光る何とやらで正にこれから先が楽しみといったところ。以下、昨年同様、新たに加わった女子マネ2名を含めた瀬田の“若鮎達”に入部に際しての抱負を語ってもらった。

1. 杉山 伸 経済学部 岐阜県立大垣北高校
厳しい練習にたえ、合宿所をにげださないのも、ポートが好きだからです。
がんばって、日本一をめざします。
2. 小原 隆史 文学部教育学科 清風高校
男ならポート！ やるぞ全日優勝！
今こそ同志社ポートのバクハツだ！
3. 奈良定 寛 文学部英文学科 光高校
ウーマン、ウルトラマン、キン肉マン、ボートマン、肉マン これらの共通性は いかに？
それにしても瀬田川の水はきたないわ。
4. 三上 和彦 文学部 北海道立旭川東高校
ボート部への入部は入学するまで考えていませんでしたが、勧誘を受け、試乗会に出てみて入部を決定しました。自分は背が低いのでポートには不利ですが、自分の能力で精一杯やっていきたいと思っています。
5. 村田 登 工学部 大阪府立三国丘高校
頑張ります。
だから密かに狙ってまず優勝!!
6. 金子 好守 経済学部
絶対無二の一漕ぎ。一漕ぎに集中します。
この漕ぎから生まれる水の音、最高です。
7. 津嶋 泰 経済学部 白陵高校
厳しい練習にもめげず、体力、精神を鍛える私です。
みんなと優勝の美酒を飲みたいネ。
伝統もいいけど、進歩も素晴らしいと思う。
8. 榊原 雅也 社会福祉学専攻 同志社国際高校
みんなのオールがそろった時のあの快感、何事にもかえられない。
同志社の伝統を築きます。
9. 山下 進 文学部国文学専攻 愛媛宇和島東高校
僕は高校からボートをやってきましたが、これからも一から出直すつもりで大学日本一、そして世界に行きたいです。
10. 畠山 尚弥 商学部 秋田県立横手高校
足かけて けり出そう1, 2, 3 他人より早く離るる我的足。
体言止めで決めてみました。
11. 重松 健一 文学部社会福祉学専攻 富山県八尾高校
僕の青春は、ポートと〇〇です。
そしてこの青春を思い切り燃えつきてやるぞ!
12. 佐藤 将人 文学部英文学専攻 新潟南高校
これから見つけていきます。ぼくのポートを。
これから探します。僕の下宿の鍵を。
13. 田中 隆一 経済学部 大阪府立大手前高校
ボートがこんなにもナイーブなスポーツだとは知りませんでした。少なくとも神経性胃炎になるまでは、とにかく頑張るだけです。
14. 乾 健治 文学部教育学専攻 大阪上宮高校
酒と女に溺れるかわりにポートに溺れます。
ポートはデリケート、でもパワフルに漕ぐ。
15. 岡田太一郎 経済学部 熊商付出身
大学青春をポートにかける先輩のエイトにクルーの一人として乗れる。足手まといにならぬよう力漕する。ストロークに力を込めて、見えないゴールに向け又力漕。
16. 大竹 宏 経済学部 高蔵寺高校
大学生活を充実させようとして入ったのがボート部。一生懸命がんばります。
まずは初勝利!!
17. 中村 祥子 神学部 北陸学院
一歩後にさがってクラブの人たちを世話したいと思います。まだ慣れない仕事ですが精一杯ガンバります。
皆さんもガンバッテ下さいネ!
18. 井上 京子 文学部英文科 大阪女学院
選手たちのボートにうちこむ姿を見て感じきする毎日です。そんな人々たちを後ろからささえたいです。
Fight!

御 寄 稿

S61年卒 田中 薫氏

朝日レガッタを観戦した。卒業して一年余後輩のレースを見るのはこれが初めてだった。単なるOBの一人なので現在の対抗、ジュニアクルーの技術的なことは言える立場でもなく、言うつもりも毛頭ない。気楽にレース見物と決め込んだ。だが久々に真近で後輩諸君の力漕ぶりを見せつけられ、かつて自分もオールを握り、力いっぱいこのコースを漕いだ記憶が体中に沸々と甦ってきた。実社会に出て二年目、大げさに言えば忘れていた何かを呼び起こされた気がした。

ボート部に入部した頃、OB諸氏が今にも辞めそうな気配が漂う私達に「大学スポーツの良さは、やめてからわかるんだ」と力説したものだ。しかし現役中は、一年の3分の2は合宿という、傍から見れば異常な大学生活の中で、練習の在り方、日常生活で起こる軋轢、OBとの折衝、新入部員勧誘等重厚な伝統を持つ運動部に起こりがちな様々な問題で悩み、考え通しの三年半だった。引退間近、カレンダーの日付けを塗りつぶし、引退の日を指折り数えたのは私だけではないだろう。

しかし実際にボート漬けの生活を離れた今、瀬田に行くと妙に懐しく、レースを見ては熱くなるのは何故か。私にも、ほんの一瞬でも心底から情熱をボートに傾けた時期があったということなのか。ふと、最近そう考えてみたりもする。もしそうならボート部で過ごした三年半は、少なくとも間違いはなかったのではないかと思う。ボートを辞め、もうボートは見るのもイヤだと本心から思うようになれば、それは非常に寂しいことだ。大学生生活イコールボート生活の現役諸君には、レースの勝敗にばかりこだわらず、振り返った時、ボート生活が少しでも輝いたものであるよう、今、目いっぱい自分なりに打ち込んでほしい。取り戻すことのできない貴重な時間を費やすのだから……。

御結婚おめでとうございます

田中 薫氏 S61年卒

今後の試合日程

○関関同立戦	7/22	琵琶湖
○関西漕艇選手権大会	7/25. 26	琵琶湖
兼瀬田川杯レガッタ	同上	同上
○全日本選手権大会	8/27~30	戸田
インカレ	同上	同上
オックスフォード盾レガッタ	同上	同上

「近藤憲司先輩叙勲の御祝報告」

去る二月十一日、漕艇部卒業生送別懇親会の席上、有志代表として御世話をされた高橋宗先輩より御祝の品が手渡されました。

『私達、時代の違いこそあれ、共に琵琶湖瀬田川で青春を過したものとしてこの名誉をとともども慶び…』との趣旨に一四三名もの旧新の先輩より寸志が集まりました。この紙上にて改めて御慶び申し上げますと共に、御賛同賜りました先輩各位へ御礼申し上げます。

現 況 報 告

五月の朝日レガッタでの完全なる敗北。特に対校エイトにおいては、準決勝で中国クルーに水をあげられたのはいたしかたないとしても、京大・関大に競り敗けたことは言葉では語るることのできない屈辱であった。以来、対校・Jr.はもちろんのこと新人クルーも含め、例年を数段上まわる練習量をこなしてきた。一・二回生の講義が田辺であるため練習時間は大分制約されるのだが、そこは練習密度によってカバーしている。そして新しい試みとして、日曜日の練習を三モーションから二モーションにして、モーションごとのメリハリを持たすようにした。そして練習量においては瀬田川ではダントツであった。

そうして臨んだ瀬田川リーグ。この決勝で又もや京大とあたったのであるが、ここでもまた朝日と同様のレース展開となってしまった。いくらこの試合には照準をあてていなかったとはいえ……。クルー全員に「またか」という思いがよぎったことは確かである。しかしそれと同時に「関選こそ」という思いがよぎったのも確かである。既に関西選手権、瀬田川杯の予選組合せも発表になった。あと試合までもうわずかか、やるしかない。

編 集 後 記

朝日レガッタの報告号にしては、随分と発行が遅れてしまいました。全て私の不徳のいたすところ…反省しきりです。

部 報 力 漕

1987年7月10日発行

発行 同志社大学ボート部
大津市瀬田3-2-30

〈編集委員〉

原 一雅	齊藤繁明
関谷晴彦	末瀬雅巳
米原栄一	配川隆司
島田恭典	小原隆史